

「さわってみる」点示学事始め — 六星から満天の星へ —

広瀬浩二郎(国立民族学博物館)

かつて視覚障害者は音と声の領域で個性を発揮していた。イタコや琵琶法師は「見えない世界をみる」職人だった。またルイ・ブライユはわずか6つの点で森羅万象を表現する「点示」を創始し、視覚優位の近代社会にあって触覚の可能性を開拓した。本発表では複雑な宇宙をあえてシンプルな点で示すことの重要性を確認するとともに、「目に見えない星」を研究対象としてきた天文学の新展開のために、視覚障害者の経験をどのように活用すればいいのかを考えてみたい。

〈用語解説〉

- ・天文学：肉眼では見えない星や宇宙の広がりや全体を全身で「みる」学問
- ・見る：視覚で事物を認識すること
- ・みる：視覚を含め全身の感覚を動員して体感する行為
- ・視覚(見る)と触覚(さわる)の3要素：
 - look＝視線を向けて意図的に見る(手線を意識し、大きくさわる)
 - see＝自然に見える、目に入る(皮膚感覚を研ぎ澄まし、全身を手にしてさわる)
 - watch＝注意してものの動きをじっと見る(一点に指先を集中し、細部を小さくさわる)
- ・身体で「みる」極意：visualize＝思い描く(想像力と創造力)
- ・点示：世界のあらゆる事象、森羅万象を“点”(＝触覚)で示すこと
- ・触文化：さわらなければわからない事実、さわって知る物のおもしろさ

1. 「みる」ことへの挑戦

- ・視覚障害者サッカーの体験(小説『サッカーボールの音が聞こえる』への期待。危険を避けるために視覚以外の感覚を総動員する。フィールド全体を思い描くことの大切さ)
- ・座頭市をめざす武道修行(「刀を振る」と「仮想敵を斬る」の相違。「無目勝流」への遠き道程。宮本武蔵の「観の目」)

2. 触文化の開拓

- ・ユニバーサル・ミュージアムとは何か(博物館における“さわる”ことの意義。“さわる”3要素で万人が「モノとの対話」を楽しむ。「さわってみる」広さと深さを視覚障害者から発信する)
- ・視覚と触覚の違い(触文化の探究は視覚優位の「近代」を問い直すことにつながる。ルイ・ブライユの再評価。「点示」の歴史的立場)

3. UD天文研究の可能性

- ・障害者の呼称について(「障がい」という表記は百害あって一利なし。「笑害」概念は定着するか。「見常者＝視覚に依拠して生活する人」と「触常者＝触覚に依拠して生活する人」の異文化間コミュニケーション)

- ・「visualize＝見えない世界をみる」天文学の新展開に向けて（感覚の多様性を掘り起こすために学校・博物館が果たす役割。「点示」に込められた二つの精神を天文教育に活かそう。「少ない材料から多くを生み出すしたたかな創造力」と「常識にとらわれないしなやかな発想力」）

〈参考文献〉

広瀬浩二郎編著『だれもが楽しめるユニバーサル・ミュージアム ― “つくる”と“ひらく”の現場から』
（読書工房、2007年）

プロフィール

1967年、東京都生まれ。13歳の時に失明。筑波大学附属盲学校から京都大学に進学。2000年、同大学院にて文学博士号取得。専門は日本宗教史、障害者文化論。2001年より国立民族学博物館に勤務、現在は民族文化研究部 准教授。主な著書に『障害者の宗教民俗学』（明石書店、1997年）、『人間解放の福祉論 ― 出口王仁三郎と近代日本』（解放出版社、2001年）、『触る門には福来たる ― 座頭市流フィールドワーカーが行く！』（岩波書店、2004年）などがある。最新刊の『さわる文化への招待 ― 触覚でみる手学問のすすめ』（世界思想社、2009年）では、新たな障害者像とユニークな博物館論を提示している。